

新女經

村松梢風

新女經

村松梢風

中央公論社



新女経 奥付

昭和三十四年六月一日印刷
昭和三十四年六月五日発行

著 者 村松梢風

発行者 栗本和夫

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

振替東京三四

凸版印刷 小泉製本

定価二八〇円

©1959

目次

逢いびき	三
ミス・カーニバル	八
美人	一一
照葉	一四
吉原の話	一七
張り見世	二〇
花艇 ホアテン	二三
宝宝 ボウボウ	二六
広東の尼寺	二八
仲の町芸者	三一
京の島原	三三
インテリ・ヌード	三七
ストリップ	三九

ヌード		四三
作家とモデル		四四
フレンチ・ラブ		四八
娘義太夫		五六
中国の女芸人		五九
夕顔		六五
女の手紙		七二
ナイトクラブ		七三
松だけ山		七六
女傑		七九
仕立屋		八二
芸の標準		八九
亀		九三
浅草		九五

親と子		九
梅ヶ香		一〇三
海岸		一〇七
スペイン		一一〇
日本女性と排外思想		一二六
男装の麗人		一二九
コーカサスの酒と女		一三三
黒人		一三九
夏草		一三一
グレース・ケリー		一三四
沙翁の故郷		一三六
吊勝子 デューパンズ		一四〇
夜網		一四三
峠の茶屋		一五一

三浦環		一五六
夢		一五五
天国		一六七
志摩の旅		一七三
金を拾いに		一七八
不老長寿		一八〇
丹後の宮津		一八三
舞踊		一八六
茶		一八九
昔の小説家		一九三
パチンコ		一九六
夜の花		二〇〇
脚 あし		二二一

新
女
經

逢いびき

二葉亭四迷がツ

ルゲーネフの短篇

「あいびき」を邦訳

したのは、彼の伝

記によると明治二

十一年だそうだが

ら、われわれ今の

人はたいがい生れ

ていない時のこと

だ。私たちがそれを読んだのは、はるか後年、日本の自然

主義文学が隆盛を極めていた頃だが、この文豪の傑作は翻

訳の完璧と相まって、当時の文学青年にはかり知るべから

ざる影響を与えたものだ。小説の内容は、猟に出た主人公

が林の中で、純真な村の娘が若者とあいびきしているのを

木蔭からぬすみ見る、という単純な筋だが、それでいて人

生や、不幸になる女の運命をはっきり描き出している。

小説というものは多く人間が幸福になることを書いては

いない。作中の主人公は男でも女でも不幸になるとか、元

来不幸であったものがこの人生では救いの道がない——と

かいたような話が多い。作家の眼というものはそういう

風に向けられるものらしい。映画でよく見るような実に都

合のいいハッピー・エンドというものは、文学にも、実人

生にもめつたにない。実際にはないことだから、娯楽を目

的とするせめて映画の上でだけでもハッピー・エンドを人

が要求するのだろう。そうして映画はハッピー・エンドで

も、そのあとがもし実際に続くとしたら、男も女も、幸福

なんてもものからは、だんだん引き離されてしまうのがおち

だろう。自分たちだけは幸福な家庭をいとなんでいると、

信じている夫婦や、恋人どうしがあったとしたら、その人

たちは、よほどお目出度いか、そうでなければ欲望という

ものを知らない人たちだからであって、知っているとしても

非常に稀薄だからである。もし人間の本能の要求すること

のは、もっと強烈であり、もっと華やかなものであること

を知ってその要求を無限に満たそうとしはじめたなら、模

範的家庭も、愛の巢も、たちまち紙屑のように吹き飛んで

しまうだろう。

社会というものは、古い道徳だの、経済的な打算だのか

ら、一おう安寧が保たれているのであって、個人の生活も

その檻の中にはいつている。恋人どうしが、永遠に幸福で

いるなどということは、地球が回転している限りありえな

いことである。

さて、ツルゲーネフの「あいびき」に話を戻して、ロシ

アの田舎の愛らしくて美しい「アクリーナ」という百姓娘

が、貴族のボーイか何かしている、金モールや腕飾りのつ

いた制服を着た、典型的女たらしで薄情な「ヴィクトル」という若者のたねまでやどしているらしいのに、男はこわれた木靴の片方でもほうろのように見棄てて、明日はご主人のお供をしてベテルスブルクへ帰るといので、これが最後の「あいびき」を白樺の林の中でしているのだ。

それでも娘は男を愛し切っている。これまでにどれほど幸福な逢いびきを重ねて、彼女は有頂天になったかしれないのに、恋の結末はこの有様である。

「アクリーナ」は、ツルゲーネフの小説でばかりでなく、現代でも、どこにでも、いっぱいいる。

恋をするということは、どうしてこんなにたのしいのだろう。そして、どうしてこんなに人間を愚かにしたり不幸にしようのだろう。

私は、東京でも丸ノ内か銀座しかほとんど知らないが、銀座辺を歩いている若い男女はまずほとんどアベックだ。まれに三人くらいの女連れというものもあるが、そういうのを見ると特殊事情だろうと思うくらいだ。いかに大都会とはいいいながら、よくもこれほど無数のアベックが出来上るものだ。

さてこのアベックだが、どこで出逢って来たのだろう。

最初から一緒に家を連れだつて出る組の中にはあるだろうが、まず少ないことは服装の支度などからおおよそ想像

される。最初にどこかでランデブーをして、それからアベックになるという段取りだろう。近頃の女の子は英語の「デート」という言葉を多く使うらしい。ランデブーの場所、昔は公園の木蔭かベンチの上とたいていきまっていたが、いまではそんなに特定の場所を必要としない。どこかの町角でも、安喫茶店でも、百貨店の一階の何々売場の前でも、利用する場所はいくらでもある。

しかしそういうのは、どっちもオフィスに勤めているかして、非常に気軽にやれるのだが、少しめんどろなのは、一日前とか二日前から約束して、新橋駅とか有楽町とかで待ち合せるやつだろう。「有楽町で逢いましょう」というくらいだから、有楽町界隈がさかんに活用されているのだろうが、あそこはあまり雑とうしているので私などは気がつかずに通つてしまう。そこへいくと新橋駅の建物の中は、落ちついていゝるし、多少ロマンチックな気分もあって、ランデブーには好適所だろう。私は横須賀線の新橋で降りることが多いので、その改札口を出ることになっているが、あの建物の中には、壁際や、角柱のかげに、どんな時でも、二、三十人以上の人が立って、だれかが改札口の方から出て来るのを待っている。

電車が着くたびに、両側の石段から降りるたくさんの人が、改札口の方へ流れて来る。夕の四時、五時頃だと、こ

れから銀座のバーやキャバレーへ出勤する女性たちが、勢よく建物から飛び出して行く。

無数の人が吐き出されて来るが、壁際に添って待っている人の相手はなかなか来ないものである。降りて来る大勢の人の中に、恋人の姿を描いては、そのつど失望する。といてまだ望みを捨ててしまったわけではない。ようやく十分も十五分も約束の時間より遅れて、どうかすると三十分も遅れて、相手の頭だけを、大勢の人の中に発見した時のよろこびと安堵。ランデブーの真髄はこの一瞬にある。

不思議なことに、待っているのは、男よりも女の方がいつも多い。本来なら、男の方が先に行っているべきであると思うが、反対である。ツルゲーネフの「あいびき」の場合でも、アクリーナは一時間も前から白樺林の中へ行って坐っていたのだ。かすかな物音にも耳をそばだてたり、時々深い溜め息をついたりして。

新橋の駅では、白樺林のように静寂ではない。それでも時々不安そうな目つきをして、円い高い天井の方を仰いだり、駅の前にタクシーが停って、客が降りたり乗ったりするのを落ちつかず眺めたりするが、電車が着くたびに、緊張した顔を改札口の方へ向ける。

ああ！ 彼はいつ来るだろう？ この恋愛には、まちがいに不幸だけがあって、幸福などありっこない、といっ

た風に、その光景は見える。

「ランデブー」というフランス語は「時間と場所を約束して面会する」ということで、日常事務的に使われている。

それがいつとなく恋人どうしが逢いびきすることにも転用されるようになり、同時に世界各国に普及して、いまでは完全な世界語になってしまったのだという。フランス以外の国では、男女の「逢いびき」の意味にだけ使われているそうだが、本家のフランスではいまでも堂々と事務的に使われている。ことに婦人が「いまからランデブーに行くのよ」などというと、語学の知識のない私などは妙な気持がした。私はバリで有名な日本の女性から二度その言葉を聞かされた。

一人は谷洋子さんだ。私が初めて彼女を見たのは、パティ・オーバーシーズのプロデューサー、ジャック・ファノー氏の家で、私がファノー氏を訪問すると、そこに、やや小柄で、長く垂れた黒い髪と、小麦色の皮膚をもった、黒のセーターにズボンをはいた若い女性がいた。私は日本人というよりも東南アジア人だろうくらいに思っていると、それが谷洋子さんだった。彼女は当時カジノ・ド・パリに出演したり、モンパルナスの劇場で上演中の「ディー・ハウス」にオキナワの芸者役で出演したりして、フランス人の間にはちょっと有名になりかけていたが、バリ在留の日

本人は一人も彼女を認めようとはしなかった。

私は彼女に非常な興味をよせて、それ以来かなり親しく交際していた。ある日の夕方、彼女は私を訪ねて来て、いろいろ面白い話を聞かせてくれる約束、そのあとキャバレーへでも案内してもらうつもりだったところが「きょう六時にランデブーがあるから」という。場所はどこですかときくと、シャンゼリゼーだという。重要な仕事の話らしい。それじゃそこまで送ってあげようと一緒に外へ出たが夕方のことで空のタクシーがいくら待っても来ない。仕方がないからバスに乗って私もついていったが、シャンゼリゼーに着いた時は六時を二、三十分過ぎてしまった。彼女はあとわてて一軒のキャフェへ飛び込んで先方へ電話をかけていたがどうしても通じない。「とにかくあたし行くから」と彼女は私をそこにほったらかして、キャフェを飛び出すと、夕暮の雑とうを極めているシャンゼリゼーをハイヒールで一目散に駆け出していった。

もう一度は石井好子さんだった。石井さんが一度日本へ帰って、またバリへ戻ってブラブラしている時だった。「一年くらいは勉強するつもりで帰って来たんだけど、以前の仲間が仕事をしているのを見ると、自分もやりたくないわね。芸人って特別嫉妬心が強いのかしら」と彼女はいつていた。

その日彼女は私をダミアの家へつれていってくれた。彼女はおそろしくダミアに愛されているらしかった。ダミアの私に与えた印象は強烈なものだった。彼女はシャンソンの泰斗であると同時に、素晴らしい詩人である。

やはり夕暮の六時頃、ダミアのもとを辞してタクシーで戻って来る途中、石井さんは「わたしこれからランデブーがあるのよ。悪いけどここで降ろして下さいません」と同じシャンゼリゼーの中頃で車をとめて降りた。芸能関係のオフィスは多くこの辺にあるらしい。

谷洋子は今度イギリス映画「風は知らない」に主演して一躍スターになり、石井好子は長期契約で外国を歌いまくっている。

外国では、往来を腕を組んで歩くのは、今では老人夫婦だけだそう。若い恋人同士の場合は手をつなぎあって歩くのだ。もう一步進んだのは女の背中へ手をまわして抱きかかえるようにして歩く。私もそういう光景を見て羨ましく思ったことがある。

ところが日本でも最近はそのことは珍しくなくなった。数寄屋橋辺を通ると、手をつなぎあったアベックなどはザラで、背中へ手を回しているのもかなり見かける。

前にもいったように、どこからこんなにアベックが出て来るかと思うくらいだ。鎌倉に住んでいる私は、たいてい

毎日散歩に出て鶴ヶ岡八幡宮の境内を通りぬけるが、昨今はことに蓮の花が見事なあの源平池の畔の、柳の老樹の根方の幾つかのベンチは必ずアベックに占領されている。しかしここでいこう組は庶民中の庶民で、趣味も古い。秋から先、鎌倉の山の中を歩くと、くさむらの中に並んで寝ているアベックをよく見かける。

なんといつても一番多いのは銀座である。その豪華な音楽喫茶へはいると、客の九割は若いアベックだ。一ぱい百円のコーヒーで音楽をききながら一時間いたって追い出しはしないだろう。便利なところができたものだ。アベックといったって必ずしも恋人同士とは限らないだろう。そういう風に悪推量をするのはこっちの思い過ごしである。しかし恋人になる可能性もあるし、その前提であると見てもいいだろう。

私もまれにはそこでデートすることがある。エレベーターの前の壁際の小さなテーブルについて、入口の方を眺めている。外はにわか雨が降り出している。雨やどりもかねて、無数のアベックが殺到して、入口で券を買って、多くは二階から上の方へ上って行く。地階にもホールがあつて、上からノゾかれるようになってゐる。二階から客席の上へ突き出しているステージでは、タンゴ・バンドの演奏があつて、女の歌手が歌っている。

私が待っている相手は姿を見せない。「何かさしつかえが出来たか、それとも日を間違えたのかな」などと考える。いくぶんホロにがい気もちはするが、それもそう悪い気もちではない。向う側の壁には、中世の寺院のような美しいステンドグラスがいくつもはめてあつて、天井からの照明にもそういうガラスが使つてある。柔かな光線が花を照らしている。自分に関係のない無数の恋人同士が静かに語り合っている。おまけに頭の上では、恋の悲しみを歌うタンゴの曲がすすり泣いている。

とうとう相手が来ないので、私は雨の往来へ飛び出す。レインコートを頭からかぶつて、道ばたに立つて、タクシーを拾おうとするが、にわか雨のこういう時は空車がない。洋品店の軒下で雨やどりをしながらタクシーを待っていると、私の横にやはり雨をよけて立っている美しい女がいる。「このひともタクシーを待っているのだろう」何かのきつかけで口をきけば、思わぬ小説のたねができるが、などと考えているところへ、素晴らしい自家用車が走って来て、洋品店の前でとまると、乗っている中老の紳士が中からトビラを開けて女を手招いだ。女はさつと雨の中へ飛び出して自動車の中へ入った。自動車は音もなく電車通りの方へ走り去った。

ミス・カーニバル

恒例の鎌倉のカーニバル……海の祭りの景物である

ミス・カーニバルのコンテストが八月の九日（土曜）

鎌倉の公民館で行われた。鎌倉カーニバルはお祭り好きで有名だった故久米正雄氏の創案で、戦前から行われていたが、戦後さらに盛大に復活されて、今では鎌倉の重大な行事の一つになっている。ミス・カーニバルを募集して海の祭典に参加させるようになったのは戦後のことだ。

全国の各都市に「ミス何々」はあるらしいが、鎌倉のミス・カーニバルはよそのにくらべると規模も大きく、土地柄もあって、一段と華やかなものだ。応募者はこの人でもかまわない。現に今年も北海道や熊本県から参加されたお嬢さんがあった。カーニバルの委員長は久米さんがずっとやっていたが、同氏の歿後は小島政二郎氏が現在委員長になっている。別に実行委員というものがあって、上森子鉄氏が委員長で、運営上のは全部実行委員の手でやるのだ。

コンテストの審査員には、各映画会社の宣伝部長、放送局、映画雑誌の代表者、スポンサー側から各百貨店の代表者、山口自転車店の山口シヅエさん等。これに鎌倉の作家側から今年は大仏次郎、小島政二郎、伊東深水、那須良輔、中里恒子の諸氏、それに私が出席した。ミスの第一位入選者は、本人の希望次第で、どの映画会社へでもニューフェイスとして入社する資格を与えられるほかに、賞金三万円とトラックでなければいけないほどの賞品がもらえる。

毎年参加者は八十人前後だが、今年も同じことであった。それだけの若い女性たちが、番号をつけた水着を着て順々に舞台へ上って来る。壮観である。審査員が採点する。これを七回くり返して十五名を選出する。最後に十五名の中から、第一位と、第二、第三位を、採点によって選び出すのだ。参加するくらいに女性に醜い人がある道理がない。潑刺たる若い肉体と、それぞれ個性美をそなえた容貌をもっている。ことに最後の十五人となると、まず例外なしに美人といっている。その十五人を舞台へ一列に並べ十分に鑑賞した上で、各審査員が点をいれるのだが、ここで彼女たちの運命が決まるのだ。

去年のコンテストでは、断然群を抜いて美しい人がいたので、第一位は圧倒的だったが、今年は平均して美しいかわりに、そうした抜群の人はいなかった。こうなると運だ。

美人の標準というものは一定してはいないし、これくらい好みのまちまちなものもない。私は髪の長い、大きくてよく光る眼をもった、上品だが野性味のある人に、最初から満点を入れ続けていた。日活の宣伝部長石神さんなども「石原裕次郎の相手役にいい」などといっていたくらいだった。むろん十五人の中へは残っていたが、最後の三人の中へは入らなかった。

舞台へ十五人を並べておいたままで、実行委員長が三人の等号と名前を発表し、奏楽と満場の拍手を浴びながら去年のミスの手で海の女王の冠を授けられる。女性の青春の最も輝かしい場面が展開されるが、その瞬間、選に洩れた十二人の失望と悔恨のようなものが感じられて、私はもう長くその場につらなるに堪えられないような気もちがして、そうそうに退場するのが例である。今年もだった。

五、六年前のことである。やはり私はミス・カーニバル・コンテストの審査員に出た。その当時は市民座を借りてやっていた。始まる前に参加者の控え室へ行つて見ると、大勢いる中で、断然、私の眼をひいた女性がいた。そばへ行つてこっそり聞いて見ると、年は二十で、官立の某大学の一年生だとのこと。丈は五尺五寸以上あって、肉付きも申分なく、満月のような丸い顔で、鼻も高すぎず低すぎず、清らかな眼は星のごとく輝いている。ぜんぜん私好みだ。

君は必ず一位になりますよと激励してやった。

さてコンテストが始まったから私は彼女に満点を入れ続けたし、隣りにいる審査員にも頼んで入れてもらった。全く彼女ほど新鮮で、かつ完全なミスはいないと思った。私はありったけの熱を入れて期待していた。むろん十人のミス（当時は十人）の中へは入った。けれども最後の決選になると五番か六番に落ちてしまった。その時の一位や二位は全く平凡な女性であった。私はガッカリもしたが、それよりも義憤に近いものを感じ、彼女に対して同情に堪えなかったので、終つてから控え室で帰り支度をしているところへ行つてねんごろに慰め、決して自信を失つてはいけなうといつてやった。彼女は涙ぐんでいた。

二、三日たつとAというその女性から手紙が来た。過日の礼をのべてあるばかりでなく自分の境遇のことなどもかなり細かに書いてあった、私は何となく興味をもつたので手紙で打ち合せて東京でAと会った。貧しい女学生の身なりをした健康なこの女性に私は大きな魅力を感じたけれども、学生のことではあるし、私にも自信はなく、食事をしただけで別れた。

それからまる五年経過した。ある時私は彼女から来た古い手紙を偶然発見したので、なつかしくもあり、好奇心も湧いて手紙を出して見た。一週間くらいすると彼女から返